

## 葛城（葛木）の歌と関連の歌

市 忠顕

広義の葛木山（葛城山）は旧河内国と大和国（現在の大阪府と奈良県）の堺の連山で、現在の二上山、葛城山、金剛山を含む。主峰は金剛山で海拔 1125m。山頂一帯は奈良県で、葛木神社が祀られている。葛城地方は、北葛城郡、御所市、五條市を含む葛木連峰の東側山麓一帯の称で、巨勢山口神社や巨勢寺跡のある御所市**古瀬**を含む。御所市の御所（ごせ）は巨勢、古瀬（こせ）と同語と考えられる。

### 〈二上山と 大津皇子〉

大津皇子、密かに伊勢の神宮に下りて 上り来ましし時の 大伯皇女（おほくのひめみこ）の御作歌（みうた）二首

我が背子を大和へ遣ると さ夜深けて 暁（あかとき）露に わが立ち濡れし（2-105）

二人行けど 行き過ぎ難き秋山を いかにか君が 独り越ゆらむ（2-106）

大津皇子 神上りましし後、大来（大伯）皇女 伊勢の斎宮より京に上る時の御作歌二首 神風（かむかぜ）の伊勢の国にも あらましを なにしか来けむ 君もあらなくに（2-163）

見まく欲り わがする君も あらなくに なにしか来けむ 馬疲るるに（2-164）

大津皇子の屍（かばね）を**葛城の二上山**に移し葬（はぶ）る時、大来（大伯）皇女の哀（かな）しび 傷（いた）む御作歌二首

うつそみの人にあるわれや 明日よりは **二上山**を 弟世（いろせ）とわが見む（2-165）

磯の上に生ふる馬酔木（あしび）を手折らめど 見すべき君が ありと言はなくに（2-166）

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

あしひきの山のしづくに 妹待つと 我立ち濡れぬ 山のしづくに（2-107）

石川郎女、こたへ奉（まつ）る歌一首

吾を待つと 君が濡れけむ あしひきの 山のしづくに 成らましものを（2-108）

大津皇子、密かに石川郎女に婚（あ）ふ時、津守連通 その事を占へ露（あら）はすに、皇子の作りましし御歌一首

大船の津守が占に 告らむとは まさしに知りて 我二人寝し（2-109）

紀道（きち）にこそ 妹山ありといへ 玉櫛笥（たまくしげ）二上山も妹こそありけれ（7-1098）（紀道の妹山は和歌山県かつらぎ町）

大坂をわが越え来れば 二上（ふたがみ）に黄葉（もみちば）流る 時雨降りつつ（10-2185）

### 〈葛城・葛木〉

丹比真人（たじひのみひと）笠磨、筑紫国に下る時作る歌一首

臣女（たわやめ）のくしげに乗れる 鏡なす御津の浜辺に・・・・家の辺り我立ち見れば 青旗の**葛木山**に棚引ける白雲隠る・・・・（4-509）

春楊 **葛城山**に立つ雲の 立ちても ゐても 妹をしぞ思ふ（11-2453）柿本人麻呂歌集

原文は「春楊葛山発雲立座妹念」で文字数が一番少ない（10文字）

春楊：春の楊で葛（藪、かづら）を作るので、葛城に掛かる枕詞。上3句は、「立つ」を言い出す序詞。後に出る「青柳の」も同様の理由で、葛城の枕詞になっている。

下の二句が 11-2453 とよく似た歌。

秋去れば 雁飛び越ゆる 竜田山 立ちても めても 君をしぞ 思ふ (10-2294)

### 楊(柳)と藪の歌

春楊(枕詞) 藪に折りし 梅の花 誰か浮かべし 酒坏の上(へ)に (5-840)

壹岐目 村氏 彼方(をちかた)

大夫が 伏し居嘆きて造りたる 垂(しだ)り柳の 藪せ吾妹 (10-1924) 題：藪を贈る

葛城の 高間の草野(かやぬ) 早知りて 標(しめ) 指さましを 今ぞ悔しき (7-1337)

この高間は御所市高天で、朝妻の西、金剛山の中腹の高原状のところ。(犬養)

葛城氏(葛城直)の奉斎した式内高天彦神社が鎮座する。

飛鳥川 もみぢ葉 流る 葛城の 山の木(こ)の葉は 今し散るらし (10-2210)

この飛鳥川は河内側の飛鳥川(二上山を水源とする)を指すと考えられる。(堀内民一)

葛城の 襲津彦 真弓 荒木にも 寄るとや君が 我が名 告りけむ (11-2639)

### 〈朝妻〉

今朝行きて 明日は来なむと 言ひしがに 朝妻山に 霞たなびく (10-1817)

この朝妻山は、広く金剛山(広義の葛城山)を指したと見る説もある。(犬養『万葉の旅』)  
子らが名に 懸けのよろしき 朝妻の 片山岸に 霞たなびく (10-1818)

高鴨神社のある鴨神を流れる葛城川上流の高台(金剛山東中腹)には高宮廃寺跡がある。

### 〈巨勢山・巨勢道〉

大寶元年辛丑の秋九月、太上天皇(持統)の紀伊国に幸(いでま)しし時の歌  
巨勢山の つらつら椿 つらつらに 見つつ思(しの)はな 巨勢の春野を (1-54)

右一首、坂門人足(さかとのひとり)

河上(かはのへ)の つらつら椿 つらつらに 見れども飽かず 巨勢の春野は (1-56)

右一首、春日蔵人老(かすがのくらびと おゆ)

54番の歌は、巨勢で9月に詠まれた歌で、「椿花咲く巨勢の春を思い浮かべよう」と歌っている。56番の歌を踏まえて詠まれている。

我が背子を こち 巨勢山と 人は言えど 君も来まさず 山の名にあらじ (7-1097)

藤原宮の役民の作る歌

やすみしし吾大王(おほきみ) 高照らす日の皇子 荒梶(あらたへ)の 藤原がうへに  
(中略) 知らぬ国 寄し巨勢道(こせぢ)より 我が国は 常世にならむ(後略) (1-50)

直(ただ)に来ず 此(こ)ゆ 巨勢道(こせぢ)から 石橋(いはし) 踏み  
なづみぞ 吾(あ)来し 恋ひて すべなみ (13-3257)

直(ただ)に行かず 此ゆ 巨勢道(こせぢ)から 石瀬(いはせ) 踏み  
求めそ 吾(あ)来し 恋ひて すべなみ (13-3320)

## 〈忍海〉

倭辺（やまとへ）に 見が欲しものは **忍海**の この高城なる 角刺の宮『顯宗紀』

『日本書紀』（磐之姫皇后の歌）

つぎねふや 山城川を 宮上（のぼ）り 我が上れば  
あを丹よし 奈良を過ぎ 小楯（をだて）大和を過ぎ  
我が見が欲し国は **葛城高宮** 我家（わぎへ）のあたり

註：この山城川は今の木津川のこと

この「葛城高宮」は森脇付近の台地に想定される。（堀内民一）

一事主神社の所在として『神名帳考証』に『釈日本紀』の一節を引用している。

「宝暦八年、葛城東下高宮丘上ニ（一事主の神を）迎へ 鎮メマツル。」

（下線、括弧内は筆者の補足）

一言主神社の少し北の山麓に「綏靖天皇高丘宮跡」の石碑がある。

『続日本紀』卷第三十一 光仁天皇（第四十九代）即位前紀の童謡（わぎうた）

**葛城寺**の前なるや。豊浦（とゆら）の寺の 西なるや。おしとど としとど  
桜井に白壁沈（しづ）くや。好（よ）き壁沈（しづ）くや。おしとど としとど  
然（しか）すれば 国ぞ栄ゆるや。我家（わぎへ）らぞ 栄ゆるや。おしとど としとど

光仁天皇のお名前は白壁王でこれは白壁（しらたま）に通じる。その妃は井上内親王である。桜井は井上内親王を暗示している。従って、この歌は、「白壁王の即位を暗示する歌」と考えられる。（宇治谷）

桜井はまた、**榎葉井**（えのはみ）とも称される。

鴨長明の『無名抄』の第四十に、「えのは井の事」という一文がある。その中の歌に

古（ふ）りにける 豊浦（とゆら）の寺の 榎葉井（えのはみ）に なお白玉を 残す月影  
豊浦は明日香にある地名。とよらとも言う。甘樫丘（あまかしのおか）がある。

平安時代の葛城の歌（文献4より引用、枕詞および季節を考慮して、並び替えた。）

しもとゆふ 葛城山にふる雪の 間なく時なく思ほゆるかも（古今集）

古い倭舞の歌。「しもと」は春の若枝（細枝）のことで、これを結って葛（かづら）を作り、それを身につけ、神前で舞を舞ったのであろう。それで「しもとゆふ」が「かづら（葛）」に掛かる枕詞になった。

衣手の さえゆくままに しもとゆふ 葛城山に 雪はふりつつ（金葉集巻四）

初時雨 ふる程もなく しもとゆふ 葛城山は 色づきにけり（千載集巻五）

まだ消えぬ 高嶺の深雪 春かけて 霞みにけりな 葛城の山（新千載集巻一）

山桜 はや咲きにけり 葛城や かすみをかけて 匂ふ春風（新後撰集巻一）

さくら花 今か咲くらし 青柳の 葛城山に 雲ぞかかれる (続後拾遺集巻一)

「あをやぎの」も「はるやなぎ」と同じく、柳で葛(藨、かづら)を作るので、葛城の枕詞になっている。

み冬つき 春しきぬれば 青柳の 葛城山に 霞たなびく (新勅撰集巻一)

白雲の たえまになびく 青柳の 葛城山に 春風ぞ吹く (新古今集巻一)

吹く風に 下葉かつ散る 青柳の 葛城山に 秋は来にけり (新続古今集巻四)

たをや女の 衣を薄み 秋や立つ 飛鳥に近き 葛城の山 (新拾遺集巻四、前中納言匡房)

葛城や 高間の山の 月かげに 秋風立ちて 雲もかからず (続後拾遺集巻五、津守國道)

この高間は御所市高天。金剛山東側の中腹にある高天高原。高天原とも呼ばれる。

よそに見し 雲やしぐれて 染めつらむ 紅葉してけり 葛城の山 (新拾遺集巻五、大蔵卿長綱)

しぐれゆく 雲のよそなる 紅葉ばも 夕日にそむる 葛城の山 (続拾遺集巻五)

### 近世の和歌

やや黄ばむ 油菜の先 見る如く 夕月にほふ 葛城の山 与謝野晶子

### 参考文献

- (1) 堀内民一著『大和万葉旅行』講談社、講談社学術文庫 1755 (2006)
  - (2) 犬養孝著『万葉の旅 (上)』社会思想社、現代教養文庫 481 (1964)
  - (3) 日本古典文學大系『万葉集』岩波書店 (1957)
  - (4) 堀内民一著『万葉大和風土記』天理時報社 (1943)
  - (5) 宇治谷 孟著『続日本紀』(全現代語訳)、講談社学術文庫 (1995)
- (引用者の判断で、漢字や「かな」などの表記を一部出典と変えています。)